

ビジネス誌で語られる 「相互行為の技法」に関する社会学的研究

—後期近代の相互行為に潜む「不安」について—

谷原 吏

第1章 問題設定と本論文の立ち位置

第1章においては、問題設定を行うとともに論文の立ち位置を確認した。

本論文は、職業生活における相互行為の技法の在り様及びその社会的位置を明らかにすることを目指すものである。それによって、従来マクロ的な社会事象を対象として語られてきた後期近代の「不安」が、職業生活における日常の相互行為にも潜んでいることを提起する。

職業生活の場面において「どうあらねばならないとされているのか」ということを問う社会学的なアプローチを行った Rose(1999)や牧野(2012)は、学術的あるいは世俗的言説それ自体を権力作用と捉え、それ自体が近現代的な「主体」を構築してきたことを論証した。それに対し本論文は、両者に欠けていた「他者へのはたらきかけ」という視点を捉えて、「相互行為の技法」に着眼した。

「相互行為の技法」は、Durkheim の「人格崇拜」、Elias の「文明化の過程」、Goffman の「相互行為儀礼」という系譜から考えて、社会学説史的にも重要な観点であった。相互行為の技法によって達成される相互行為規範は、人々の情感抑制や他人と接する仕方の在り様に関するシグナルであり、我々の日常生活を維持しているものであると同時に、排除の契機にもなるのである。

第2章 職業生活における相互行為の技法の現在

第2章では、現在性に照準して、2000 年代における相互行為の技法を観察した。

第1節では、後期近代論の知見から「authenticity」を分析の鍵概念とすることを提起した。

第2節では、メディア論の知見から「相互行為の技法」に関する文化的な媒体としてビジネス誌を捉えることができるということを結論付けた。

第3節においては、『プレジデント』及び『BIG tomorrow』が特集する相互行為の技法に着目することによって、実際にどのような形で「authenticity」が語られているかを確認した。その結果、①わざとらしくないこと、②本心と言動の一致、③熱意や本気度、という形で authenticity が表れていた。そして、言説の内容からも、authenticity が言説化されているという事実そのものからも、「authenticity を演出する」という矛盾を孕んだ相互行為の技法が存在していることが見て取れた。そしてこのことは、自己の再帰性を助長することを帰結する。

メディアが、「authenticity の演出」及びその演出の多元性という相互行為の技法を語る。そしてこの技法が、自己の再帰性と多元性という後期近代的な特徴を助長させる。こうした循環性に、後期近代の「不安」を見出したのである。

第3章 相互行為の技法はどのように読まれているのか

第3章においては、相互行為の技法に関する言説の受容状況について検討した。質問紙調査から得られたデータを分析した結果、受容態度の両義性が示唆された。「肯定的な読み」を行えば行うほど、「まゆつばものだ」「かえって対人関係にマイナスだ」という印象も強くなるのである。同時に、「他者とうまくコミュニケーションできているか」を確認する参照点としての位置も確認できた。本章からは、相互行為の技法に関する言説は「私たちがその中に参加しているリアリティの一部」(Silverstone 1999=2003: 31)であることの意味を明らかにした。

第4章 相互行為の技法はいかにして語られるようになったのか

第4章においては、1980 年代『BIG tomorrow』の記事を分析することにより、相互行為の技法に関する言説が大衆化した契機を探求した。その結果、次のことが明らかになった。

第一に、相互行為の技法に関する言説が、「学歴エリート」へ対抗し出世競争を勝ち抜いていくための処世の方法として大衆化しつつあったことである。第二に、西洋由来の心理学的知見が、「処世術」を語るためにしばしば参照されたということである。

その内容としては、功利性(=出世すること)のために、「日本的なる“情”」に配慮する必要があり、そのための私的つき合いの重要性が露骨に語られていた。しかし 2000 年代においては、私的つき合いの重要性は 80 年代ほど露骨に語られておらず、代わって、心理学やポスト近代型能力の語彙を取り入れた公的領域における相互行為の技法が拡大している。これは、消費されるものとしての相互行為の技法という観点から、それが自己循環的に増大している帰結であると想定された。ここに、相互行為の技法に関する言説が増大する構造における循環性、そしてそれに伴う「不安」を見出すことができたのである。

第5章 本論文の総括

現代日本の職場における相互行為の技法に関する言説は、その内容においてもそれが増加している構造においても循環性を持っている。本論文はここに、後期近代社会における「不安」を見出すことができると考えたのである。

従来の後期近代論において語られる「不安」はいずれも、マクロな社会問題を議論の対象としたものである。一方、職業生活というミクロなフィールドは多くの人が一日の生活の大部分を過ごす場所である。そうした日常の次元にすら後期近代的なる「不安」が潜んでいるのだとしたら、我々はそれを認識しておかねばならない。本論文は、既存の後期近代論に対して、そうしたことを呼びかけるものである。